

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平11-180705

(43) 公開日 平成11年(1999) 7月6日

(51) Int. Cl.
C 01 B 25/32

識別記号

P I
C 01 B 25/32

V

審査請求 未請求 請求項の数 9 O L (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願平9-355637
(22) 出願日 平成9年(1997) 12月24日(71) 出願人 00003047
村岡石灰工業株式会社
栃木県安藤郡高生町宮下町1番10号
(72) 発明者 門岡 英敏
埼玉県所沢市東所沢和国2-3-2-201
(72) 発明者 守吉 佑介
東京都目黒区谷塚8-2-27
(72) 発明者 遠野 繁男
栃木県足利市石塚町775-3
(72) 発明者 清水 祐勝
東京都練馬区豊玉南1-4-3
(74) 代理人 弁理士 青森 昌二

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 多孔質アバタイトを少なくとも表層に有する固体物質の製造方法

(57) 【要約】

【課題】 生体高分子や生体有害有機または無機イオンの吸着材、薬剤徐放担持体、微生物や酵素の担持体などとして利用される多孔質アバタイトを少なくとも表層に有する固体物質を、高温過程を経ることなく、簡便に製造する。

【解決手段】 カルシウム含有固体物質をリン酸イオンを含み且つpHが7、6以上の水溶液と接触させる。出発原料となるカルシウム含有固体物質としては、石灰石、珪灰石(ウエラストナイト)、貝殻、ウニ殻、サンゴなどの天然原料、或はオートクレーブ養生で生成したトベルモライト又はゾリトライトを主成分とするケイ酸カルシウム水和物、石膏の水和硬化体、ポルトランドセメントの水和硬化体及びアルミナセメントの水和硬化体などの人工原料、又はこれに更に骨材や繊維材を加えた

JP,11-180705,A

* STANDARD * ZOOM-UP ROTATION No Rotation REVERSAL

RELOAD

PREVIOUS PAGE

NEXT PAGE

DETAIL

(2)

特開平11-180705

2

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 カルシウム含有固体物質をリン酸イオンを含み且つpHが7、6以上の水溶液と接触させることを特徴とする多孔質アパタイトを少なくとも表層に有する固体物質の製造方法。

【請求項2】 水溶液中のリン酸イオン濃度が0、1モル/リ(リッター)以上である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項3】 リン酸イオンを含み且つpHが7、6以上の水溶液が、正リン酸の水溶液にアンモニア、水酸化ナトリウム及び水酸化カリウムの内の少なくとも1種を加えてpHを7、0以上に調整したものである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項4】 リン酸イオンを含み且つpHが7、6以上の水溶液が、リン酸二水素アンモニウム、リン酸水素二アンモニウム、リン酸二水素ナトリウム、リン酸水素ナトリウム、リン酸二水素カリウム及びリン酸水素カリウムよりなる群から選ばれた少なくとも1種の水溶液、又は必要に応じてアルカリ性物質を添加してpHを7、0以上に調整したものである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項5】 カルシウム含有固体物質が、炭酸カルシウムを主成分とする固体物質である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項6】 炭酸カルシウムを主成分とする固体物質が、石灰石、貝殻、ウニ殻及びサンゴのうちのいずれかである請求項5に記載の固体物質の製造方法。

【請求項7】 カルシウム含有固体物質が、ケイ酸カルシウムを主成分とする固体物質である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項8】 ケイ酸カルシウムを主成分とする固体物質が、珪灰石(ウォラストナイト)及び石灰とケイ酸の混合物をオートクレーブ養生することにより生成したケイ酸カルシウム水相物のうちのいずれかである請求項7に記載の固体物質の製造方法。

【請求項9】 カルシウム含有固体物質が、石膏の水和硬化体、ポルトランドセメントの水和硬化体及びアルミナセメントの水和硬化体のうちのいずれかである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は多孔質アパタイトを少なくとも表層に有する固体物質の製造方法に関する。アパタイトは、脊椎動物の骨や歯の主成分に類似した化学組成を有し、生体親和性に優れていることから、骨や

【0002】

【従来の技術】 アパタイトは、一般式 $A_{10}(MO)_6X_2$ (ここでAはCa, Ba, Mg, Sr, Pb, Cd, Zn, Ni, Fe, Al, Laなどの1、2、3価の陽イオン、MはP, As, V, S, Siなど、XはF, OH, Cl, Oなど)の組成を持つ鉱物の総称である。この中で生体と最も関係が深いのは $Ca_{10}(PO_4)_6(OH)_2$ で表わされるハイドロキシアパタイトである。ハイドロキシアパタイトは一般式 $Ca_{10}(PO_4)_6(OH)_2 \cdot nH_2O$ ($0 \leq n \leq 2.5$, $0 \leq x \leq 2.5$)であり、カルシウム及び(OH)基は不定比性を持つことが知られている。

【0003】 アパタイト硬化体は通常ハイドロキシアパタイト粉を900~1100℃、10MPa程度の高圧下で焼結し、圧縮強度100MPa程度の硬化体を得ている。多孔質アパタイトの製造方法としては、リン酸カルシウムセメントの水硬反応を利用する方法、乾度調整したアパタイト粒子又はそれをポリマー粒子を混合して成形・焼結する方法が知られている。しかし前者ではセメント粉体の製造、後者では焼結で、それぞれ高温過程を必要とし、コスト高になる問題が指摘され、より簡便・廉価なプロセスの開発が要望されている。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 本発明は、生体高分子や生体有機物又は無機イオンの吸着剤、薬剤解放担持体、微生物や酵素の担持体などとして利用される多孔質アパタイトを少なくとも表層に有する固体物質を、高温過程を経ることなく、簡便に製造する方法を提供することを目的とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】 本発明に係る多孔質アパタイトを少なくとも表層に有する固体物質の製造方法は、カルシウム含有固体物質をリン酸イオンを含み且つpHが7、6以上の水溶液と接触させることを特徴とする。

【0006】 例えば石膏の水相硬化体(二水石膏)は、リン酸イオンを含む水溶液としてリン酸水素二アンモニウム水溶液を使用した場合、次のような反応でアパタイトへ転化する。

$(10-x)CaSO_4 \cdot 2H_2O + 6(NH_4)_2HPO_4 + nH_2O \rightarrow Ca_{10-x}(PO_4)_6(OH)_2 \cdot nH_2O + 6(NH_4)_2SO_4 + (4-x)H_2SO_4 + (18-x)H_2O$
ここで、生成系の初期の化学式はアパタイトの一様式で、 $0 \leq n \leq 2.5$; $0 \leq x \leq 2.5$ である。

【0007】 出発原料となるカルシウム含有固体物質と

JP,11-180705,A

* STANDARD ZOOM-UP ROTATION No Rotation REVERSAL

RELOAD PREVIOUS PAGE NEXT PAGE DETAIL

特開平11-180705

(3)

3

トの水相硬化体及びアルミナセメントの水相硬化体などの人工原料又はこれに更に骨材や添着材を加えたものいずれであっても良い。出発原料の形状としては、粒状体、錠状物、塊状、板状、ブロック状など、任意の形状で良い。

【0008】アバタイトの生成反応はpHが7.0以上の中性又は塩基性領域で進行する。pH変動が酸性領域にまで及ばないように反応源のpHを高目しておくこと、及び反応濃度を多くしておくことが必要である。水溶液中のリン酸イオンの濃度は、出発原料中のカルシウム分をアバタイトへ転換するに充分であれば特に規定されるものではないが、0.1モル/L(リッター)以上、好ましくは0.5モル/L以上、更に好ましくは1.0モル/L以上、2.5モル/Lまでの範囲とすることが望ましい。pHが7.0未満の酸性の場合は完全なアバタイトへの転換が得られず、酸性で安定なリン酸水素カルシウム(CaH₂PO₄)、並びに：モノアバタイトを副生成する。しかし反応の初期にpH7.0未満の酸性領域であることは差し支えない。だがその場合は、反応中にアルカリを添加してpHを7.0以上にすることが必要である。

【0009】反応温度は特に限定されないが、アバタイトへの転換反応を進めるため、60℃以上、好ましくは80℃以上とするのが良い。

【0010】反応時間は、リン酸イオン濃度、反応温度及び多孔質アバタイト化された表層の厚さにより異なるので、一定の基準を定めることはできないが、通常数時間から数日の範囲である。

【0011】リン酸イオンを含み且つpHが7.0以上の水溶液としては、正リン酸の水溶液にアンモニア、水酸化ナトリウム及び水酸化カルシウムの内の少なくとも1種を加えてpHを7.0以上に調整したもの、或はリン酸二水素アンモニウム、リン酸二水素ナトリウム、リン酸二水素ナトリウム、リン酸二水素ナトリウム及びリン酸二水素ナトリウムよりなる群から選ばれた少なくとも1種の水溶液で、必要に応じてアルカリ性物質を添加してpHを調整したものが使用できる。

【0012】本発明により生成するアバタイトは厚さ0.3μm以下、市2.0~10μmの六角板状のアバタイト特有の結晶で、その結晶粒子の隙間は0.5から0.7μmの多孔質である。

【0013】このようにして製造された多孔質アバタイトを少なくとも表層に有する固体物質は、数μmオーダーの微孔を有するので、菌類、微生物、酵素類の担持

4

0.5μm程度の表層が多孔質アバタイト化されれば十分な場合が多い。

【0015】カルシウム含有固体物質からアバタイトへの転換反応は、カルシウム含有固体物質の外側から内部に向かってアバタイト化が進行する拡散ないしは界面反応律速型の反応である。この際、転換反応過程における応力歪みの発生の問題と、表層のみをアバタイト化した場合における芯部のカルシウム含有固体物質と生成したアバタイト結晶の親和性の問題がある。

【0016】新結晶の表層のみをアバタイト化する場合は実施例1~4のように比較的低温(70~100℃)で長時間の反応で良いので応力歪みの発生の問題は考慮しなくても良い。石膏、ボルトランドセメント、ケイ酸カルシウム(珪灰石)などでは親和性が高く、比較的狭小な多孔質アバタイト結晶と固着しているが、石灰石では付着性が弱い。一方、同じ硫酸カルシウム系ではあるが、貝殻、うに殻、サンゴなどの生物由来、すなわち蛋白質等を含有する複合硫酸カルシウム系では表層に生成したアバタイト結晶と水素結合を生じるため強固に結合し、安定していることが分った。

【0017】一方、粒形状より大きい板状、ブロック状などの成型体の硬部まで、或は完全にアバタイト化しようとする場合の反応過程においては、アバタイト層と芯部のカルシウム含有固体物質との反応界面には両者の物質の違いによる密度差(比容積差)による応力歪みが発生する。例えばカルシウム含有固体物質として二水石膏を使用した場合、その密度はアバタイト:3.21g/cm³、二水石膏:2.32g/cm³、半水石膏(100℃以上で二水石膏の脱水により生成):2.7g/cm³、無水石膏(120℃以上で半水石膏の脱水により生成):2.93g/cm³である。この密度差による界面応力歪みが大きい場合、或は急激に発生した場合、界面割れによって亀裂が発生する。従って、反応濃度、反応処理時間、反応温度、および反応源pHをそれぞれ適切に設定して転換反応を進める必要がある。特に反応濃度が高すぎると反応が加速されるので亀裂を生じ易くなる。

【0018】【発明の実施の形態】以下実施例により本発明を具体的に説明するが、本発明は下記の実施例に限定されるものではない。

【0019】

【実施例1】2モル/L濃度のH₂PO₄水溶液に水酸化ナトリウムを加えpH11.0の塩基性リン酸水溶液500mLを調製した。その水溶液を70℃に設定した

JP,11-180705,A

* STANDARD * ZOOM-UP ROTATION No Rotation REVERSAL

RELOAD PREVIOUS PAGE NEXT PAGE DETAIL

(4)

特開平11-180705

5

石を得た。このものを定置型電子顕微鏡で観察したところ、厚さ0.2~0.3 μm 、巾2.0~3.0 μm の六角板状のアパタイト特有の結晶が石灰石表面に壁方向にそろって生成していた。結晶間の隙間は0.5から0.7 μm であり、多孔質であった。また表面をメノウ乳鉢中ですりつぶし粉末X線回折により測定したところ、ハイドロオキシアパタイトであることが分った。なお、乳鉢で生成物を全部すりつぶし微粉砕した粉末試料をX線回折により測定したところ、炭酸カルシウムとアパタイトの2相が測定できた。このことから芯部が未反応の石灰石であり外周部はアパタイト板状結晶が壁方向に生成していることが分った。なお、反応時間をさらに長くし、しかも反応促進するためにマグネチックスターラーで攪拌しながら48時間反応したところ、ほぼ同一粒形状のアパタイト粒子が分散した乳濁色のスラリー状となった。

【0020】

【実施例2】1モル/LのH₂PO₄水溶液にアンモニア水を加えPH9.0の水溶液500mLを調製した。その水溶液を95℃に加熱した恒温水槽に保持し、95℃の恒温に達した後に貝殻(赤貝)の1.0~1.5mm粉砕物約1gを入れ4時間反応させた。反応後、連続して濾過分別し蒸留水にて十分洗浄した。固形分を100℃の乾燥器中で2時間乾燥した。赤貝の貝殻の反応前の定置型電子顕微鏡写真と反応後の定置型電子顕微鏡写真を対比したところ、本反応物も実施例1と同様厚さ0.2~0.3 μm 、巾4~6 μm の六角板状の結晶が本

6

*壁方向にびっしり並んでおり、結晶間の隙間が認められ、表面に多孔質状アパタイトを有し中心部が赤貝の貝殻である粒子が得られたことを確認した。赤貝の貝殻の反応前の定置型電子顕微鏡写真にはアパタイトの板状結晶は認められなかった。

【0021】実施例2で得た多孔質アパタイトを表面に有し芯部が赤貝の貝殻である1.0~1.5mmの粒状固体物質を140℃で2時間減圧乾燥した。これに工業技術院微生物工業技術研究所に寄託している微生物菌等第12954号(FERM-P-12954:以下FERMと略称)を酵母エキス0.2重量%、ペプトン0.5重量%を添加しpHを7.0に調整した液体培地を用いて130rpmの回転数で168時間振とう培養して培養液1mLあたり 1×10^8 個に達するよう大量培養した。このFERMはザリガニ属の植物病原菌に抗菌活性を有する微生物でアルカリ性で活性を示す。実施例2の原料の微生物相対性能を調べるため、恒持体として9.95gを計量し攪拌しながら1mLのFERMを減圧水1mLして希釈し合計2mLを加えた。このものは恒持体1gあたり 1×10^8 個のFERMを恒持していた。恒持体の性能を調査する目的で38℃の恒温条件下インキュベーター直後と1日目、2日目及び30日後における定着率を調査した結果を表1に示す。このようにして得られた恒持体の性能は高いものであった。なお出発原料の赤貝の貝殻は全く恒持能力を示さなかった。

【0022】

【表1】

恒持体1g当りの菌数(個)				
直後	10日	20日	30日	
1×10^8	1×10^8	1×10^8	9×10^7	

【0023】

【実施例3】1モル/L濃度のH₂PO₄水溶液に水酸化カルシウムを加え、PH9.0の水溶液500mLを調製した。その水溶液を100℃に保持して、繊維直径3.0~5.0 μm 、繊維長さ150~200 μm 、アスベクト比5~7の天然ウォラストナイト(ケイ酸カルシウム)5gを入れ10時間反応させた。反応後実施例1と同様に濾過洗浄後乾燥して、ウォラストナイトの針状を保持したまま中軸方向に成長した針状アパタイト結晶が表面に生成した多孔質の繊維状物質が得られた。

【0024】

【実施例4】普通ポルトランドセメント単独に水を加え

を除出し8時間反応させた。反応終了後、実施例1、2と同様に洗浄乾燥後、ほぼ同一粒径の表面にアパタイト六角板状結晶が壁方向に成長した結晶粒子間の隙間が約5~10 μm の多孔質粒状物約10gを得た。

【0025】

【実施例5】1辺約10mmの立方体状の二水石膏還元体(気孔率24%、乾燥圧縮強度34MPa)約1.70gを1.0モル/L濃度のリン酸水素アンモニウム水溶液(PH8.2)の約50mLと共に4フ化エチレン樹脂製压力容器に密封し80℃で5日間保持し反応させたところ気孔率54%、乾燥圧縮強度11MPaの芯部がモネナイト(CaH₂PO₄)で外側がアパタイト

JP,11-180705,A

☒ STANDARD ☐ ZOOM-UP ROTATION ☐ No Rotation ☐ REVERSAL

(5)

特開平11-189705

8

【実施例6～18】リン酸水素二アンモニウム水溶液の濃度、反応温度及び反応時間を変えて実施例5と同一の二水石膏硬化体を乾燥した結果を、実施例5の結果と共に

【0027】

【表2】

実施例	(NH ₄) ₂ HPO ₄ 濃度 g/L	温度 ℃	時間 日	生成物 表層/芯部	気孔 率 %	圧縮 強度 MPa
5	1.0	80	5	7.6g/g/7.6g/g	64	11
6	1.0	90	5	7.6g/g/7.6g/g	55	11
7	1.0	100	5	7.6g/g	60	12
8	1.0	120	5	7.6g/g	63	11
9	1.0	140	5	7.6g/g	62	12
10	1.0	150	5	7.6g/g	60	8
11	1.0	140	1	7.6g/g/無水石膏	61	15
12	1.0	160	1	7.6g/g/無水石膏	62	9
13	1.0	180	1	7.6g/g	63	亀裂あり
14	1.0	220	1	7.6g/g	65	亀裂あり
15	0.5	100	5	7.6g/g/半水石膏	59	4
16	0.5	120	5	7.6g/g/無水石膏	61	7

【0028】実施例5～18は1辺約10mmの立方体状の二水石膏硬化体を多孔質アバタイト化する場合である。リン酸水素二アンモニウム水溶液の濃度が1.0モル/Lの場合、反応温度が80℃、90℃の場合は5日間かけても芯部まではアバタイト化しないが、しかし反応温度が100℃以上であれば5日以内に芯部までアバタイト化する。反応温度が180℃以上であれば1日以内に芯部までアバタイト化するが、しかし亀裂を生じる。従って、芯部までアバタイト化された亀裂のない成型体を得るには、100℃以上、160℃以下の温度で※

※時間をかけて乾燥することが望ましい。このようにして、芯部まで完全にアバタイト化され、しかも適度な圧縮強度を有するブロック状の多孔質アバタイトが得られる。

【0029】

【発明の効果】生体高分子や生体有害物質又は無機イオンの吸着材、薬剤除染剤、微生物や酵素の担持体などとして利用される多孔質アバタイトを少なくとも乾燥に有する固体物質を、蒸溜過程を経ることなく、簡便に製造できる。

フロントページの続き

(72)発明者 竹川 潤平
東京都東久留米市小山3-2-27

(72)発明者 石部 恵雄
神奈川県平塚市東海岸北5-15-35
(72)発明者 千葉 行人
東京都武蔵野市西久保1-22-2-206

JP,11-180705,A

* STANDARD * ZOOM-UP ROTATION No Rotation ☐ REVERSAL

RELOAD PREVIOUS PAGE NEXT PAGE DETAIL

JP 1999-180705 A5 2005.3.17

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第3部門第1区分

【発行日】平成17年3月17日(2005.3.17)

【公開番号】特開平11-180705

【公開日】平成11年7月6日(1999.7.6)

【出願番号】特願平9-355637

【国際特許分類第7版】

C 01 B 25/32

【F I】

C 01 B 25/32

V

【手続補正書】

【提出日】平成16年4月21日(2004.4.21)

【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】特許請求の範囲

【補正方法】変更

【補正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項1】

カルシウム含有固体物質をリン酸イオンを含み且つpHが7.0以上の水溶液と接触させることを特徴とする多孔質アパタイトを少なくとも表層に有する固体物質の製造方法。

【請求項2】

水溶液中のリン酸イオン濃度が0.1モル/L(リッター)以上である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項3】

リン酸イオンを含み且つpHが7.0以上の水溶液が、正リン酸の水溶液にアンモニア、水酸化ナトリウム及び水酸化カリウムの内の少なくとも1種を加えてpHを7.0以上に調整したものである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項4】

リン酸イオンを含み且つpHが7.0以上の水溶液が、リン酸二水素アンモニウム、リン酸二水素アンモニウム、リン酸二水素ナトリウム、リン酸二水素ナトリウム、リン酸二水素ナトリウム及びリン酸二水素ナトリウムよりなる群から選ばれる少なくとも1種の水溶液、又は必要に応じてアルカリ性物質を添加してpHを7.0以上に調整したものである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項5】

カルシウム含有固体物質が、炭酸カルシウムを主成分とする固体物質である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項6】

炭酸カルシウムを主成分とする固体物質が、石灰石、貝殻、ウニ殻及びサンゴのうちのいずれかである請求項5に記載の固体物質の製造方法。

【請求項7】

カルシウム含有固体物質が、ケイ酸カルシウムを主成分とする固体物質である請求項1に記載の固体物質の製造方法。

JP,11-180705,A

* STANDARD ZOOM-UP ROTATION No Rotation ☐ REVERSAL

RELOAD

PREVIOUS PAGE

NEXT PAGE

DETAIL

(2)

JP 1999-180705 A5 2005.3.17

カルシウム含有固体物質が、石膏の水和硬化体、ポルトランドセメントの水和硬化体及びアルミナセメントの水和硬化体のうちのいずれかである請求項1に記載の固体物質の製造方法。

【請求項10】

芯部のカルシウム含有固体物質の少なくとも表層に多孔質アバタイトを有する固体物質であって、前記多孔質アバタイトは所定の厚さおよび幅を有する六角板状のアバタイト結晶からなり、その結晶粒子間に所定の隙間を有し細孔が形成されていることを特徴とする新規な固体物質。

【請求項11】

生体高分子や生体有害有機または無機イオンの吸着材、薬剤徐放担持体、微生物や酵素の担持体、トリクレンなどの有機脂溶性化合物の無害化分解触媒から覆われる用途に使用されることを特徴とする請求項10に記載の新規な固体物質。

JP,11-180705.A

* STANDARD * ZOOM-UP ROTATION No Rotation ☐ REVERSAL

RELOAD

PREVIOUS PAGE

NEXT PAGE

DETAIL